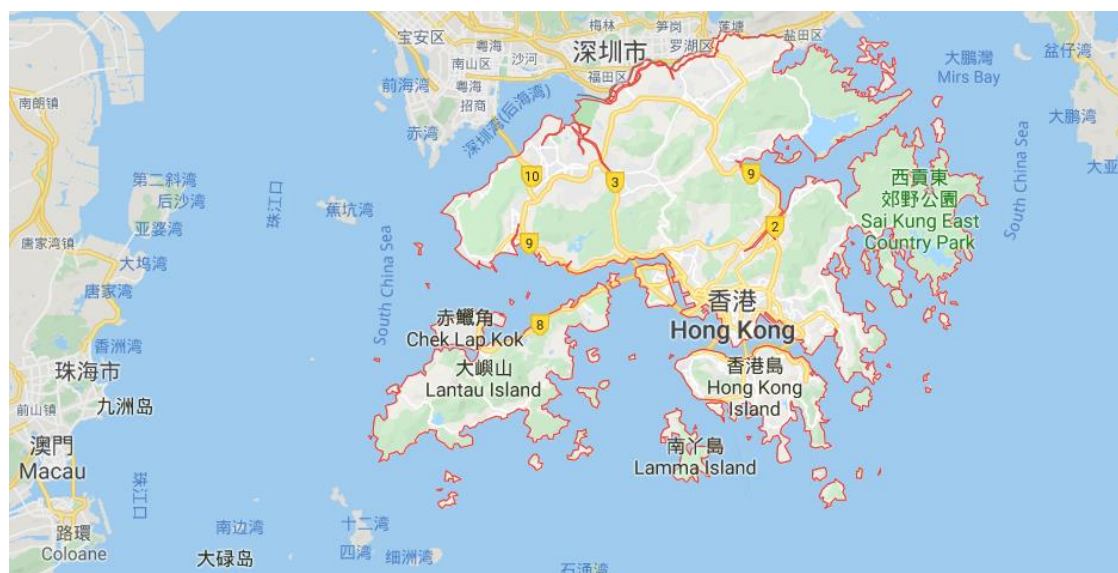


香港の時を旅する四冊

国際部 飯崎 充



地図データ©2019 Google 日本

香港は、私たち日本人や日本企業にとって、早いうちから最も身近な海外の一つでした。その香港が今また世界の耳目を集めています。2019年4月に逃亡犯条例の改正案を香港政府が立法会（議会）に提出したことへの反発に始まった市民の大規模デモは、改正案撤回でも収まらず、反香港政府・反中国運動として長期化し、この原稿を書いている時点でいまだに終息の気配が見えておらず、世界が成行きを懸念するところとなっています。相対的な地位は以前より低下したとはいえ、世界の金融センターの一つであり、その政治的混乱の長期化は世界経済に多大な影響を及ぼす恐れがあります。

香港は、東京都の半分の面積に748万人（2018年）が居住する人口密集地です。東アジアのハブに位置する地理的優位さと、自由貿易、レッセフェールの経済活動の自由さを梃子として繁栄を築いてきました。既に一人当たりGDPは日本を上回る豊かさながら、もともと植民地経済に根差す小さい政府・低い税率という制度設計は、支配層・金持ち優先になっていると言え、ジニ係数はアジアで最大という格差社会でもあります。

香港の歴史は、アヘン戦争後の1842年に香港島が英国に割譲されたことに始まることはよく知られています。その後、九龍半島南端部の割譲、新界及び周辺島嶼の99年租借で、現在の香港の全域が英国の植民地となります。第二次大戦中に日本が占領して軍政下に置いた「3年8ヵ月の苦難」の期間以外は、一貫して英国の植民地統治の下にありました。その後足掛け3年にわたる交渉を経た1984年の中英共同声明に基づいて、1997年に

香港島、九龍も含めた全域が、「一国二制度」の下で中国に返還されました。しかし、経済環境の変化に加えて、高度な自治を認めて「五十年不変」とされた「一国二制度」のあり方をめぐって、しばしば香港政府およびその背後にある中国中央政府と香港市民の様々な政治勢力との間で対立が起こり、ギクシャクしながら現在に至っています。忘れてならないのは、香港は、中国に返還されて22年ですが、それ以前は英国の「植民地」であって、その歴史において市民が政治的決定権を持ちえたことは一度もないということです。

ここでは、香港を主要な舞台とした小説四冊を手がかりに、そこに描かれた第二次大戦後から現在に至る香港の「時」に思いを馳せてみたいと思います。

前半は、作者の実体験を基にした作品で、もはや「古典」とも言える二冊、後半は一転して、近年評判を呼んだエンターテインメント小説二冊です。



ハン・スーイン『慕情』（角川文庫）



沢木耕太郎『深夜特急1』（新潮文庫）

1. 『慕情』ハン・スーイン著 A Many-Splendored Thing (1952) (深町真理子訳 角川文庫 1970 注：現在絶版で入手困難)

筆者と同じか上の世代の方はみなさんご存知でしょう。1955年の米国映画「慕情」Love is a Many-Splendored Thing（監督：ヘンリー・キング、主演：ジェニファー・ジョーンズ、ウィリアム・ホールデン）の原作です。

国共内戦末期の1949年、香港には中国各地から資産家や欧米人宣教師とその家族、難民たちが、或いは逐われ、或いは戦火を逃れて続々と流れ込んできており、隣接する広東に集結する中国共産党軍がじきに香港にも進駐してくるのではないかと恐れていました。中国・ベルギー（映画では英国）の欧亜混血（ユーラシアン）であるハン・スーインは、中国と欧州の双方で学び暮らした経験を持ちますが、中国国民党軍の将校であった夫を国

共内戦で亡くし、幼い一人娘を抱えて香港で勤務医として多忙な日々を送っていました。彼女は、共通の友人が縁で、英国人（映画では米国人）の通信社特派員マーク・エリオットと知り合います。マークは中国だけでなく、当時、宗主国と現地民族主義勢力、共産主義勢力が入り乱れ騒乱が相次いでいたインドネシア・ベトナム・マラヤなどアジア各地を取材して回っていました。やがて二人は愛し合うようになります。マークには夫婦仲がよくなくてシンガポールに残した妻がいて、離婚の話し合いをしますがうまくいきません。ほどなく大陸では内戦が共産党側の勝利となって新中国が成立、誰もが新しい時代に動き出す中で、スーインはマークとの愛、自分の将来を思い悩みます。そこに朝鮮戦争が勃発、マークはその取材に行くことを余儀なくされ、朝鮮戦争への疑問を綴る手紙をスーインに書き続けますが、米軍機による無差別爆撃に巻き込まれて命を落としてしまいます。

102分間の映画は、スーインの葛藤が裏のテーマではあるものの、後半はほとんどスーインとマークの大人の悲恋物語という仕上がりになっていたのに対し、邦訳で小さい活字がぎっしり詰まった昔の文庫本で560ページという大部である原作は、ラブロマンスという範疇を越えて、時代と場所を背景に大勢の人物が動く群像劇の中で、作者の複雑にして様々な思いが吐露された非常に深く重い小説となっています。

東洋対西洋、欧米人とアジア人、近代と封建、新しいものと古いもの、富者と貧者、自由と秩序、寛容と熱情、--- 当時の香港には色々な立場の人たちが集まり、とてつもない混沌が渦巻いていて、誰もがその帰趨に不安を抱き、身の振り方を思い悩んでいました。

スーインは欧亜混血という出自に自信を持ち、自らのうちで色々な二項対立を解消しようとし、しかし、それらは決して交じり合うことはありません。上流社会と下流社会は別もの、白人と中国人の間には厳然たる区別意識があり、中国人の方でもそれをよしとしていました。宣教師をはじめとする西洋人を逐い出した中国革命は、西洋の知識に学んだアジア側の西欧世界に対する初めての勝利と言えますが、それをよしとせず大陸を離れる中国人もいれば、悪乗りする日和見主義者もいる。スーインは、中国を否定して米国に逃れる妹スーチンと異なり、自分は封建的な因習も踏まえた中国人であると意識していますが、西洋近代の価値観に親しんだ知識人として、新体制との折り合いに悩みます。欧亜混血は解決ではありません。白人には一段下に見られ、伝統的中国人からは良き同胞とは思われないどっちつかずの存在なのでした。アジアで暮らしアジアを良く理解するマークとの間にさえ、スーインは断絶を感じてしまいます。この場所、この時間でなければ愛し合うことはできなかったのではないかと。

作者は、香港を、多くの人間のための漂泊の岩で、借りた時の上に生きている、と表現します。そして、香港にいる人は、みな心では短期滞在者であり、自分をどこかよそへ行く途中であるようにみなしている、と。「借りた場所、借りた時間 (On borrowed place, on borrowed time)」です。これからどうなるのか、どこに向かうのがよいのか見通せないから、

香港にとどまって今を生きる、言い得て妙の台詞となりました。

やろうと思えばできたのに、中国共産党軍が香港に進駐しなかったのは、ここで英国と事を構えるのではなく、利用した方が長期的に得策である、という周恩来の判断があったからだと言われます。それを受けて、英国は香港を守るために、成立して間もない 1950 年にいち早く新中国を承認します。

本書の終盤で、英国が新中国を承認した後、新生中国を支持する人物が、マークに向かって香港の水平線をさしながらこう言う場面があります。「我々はまだしばらくはこれをこのままにしておくと思います。もっともいずれは取り返すつもりですがね」 それに対して、マークはこう返します。「けっこうじゃないか。いつかはこれはきみたちに返還されるだろう。アジアはアジア人の手に委ねられるべきなんだ」

この作品が書かれたのは、物語の直後である 1952 年です。租借が当初の約束通りに 99 年間続いて、割譲された香港島・九龍も含めて全域が 1997 年に中国に返還されることになるなど、誰も想像できなかった頃です。「いずれは」は明日のことかもしれず、三年後、十年後かもしれない、はたまた、永遠に来ない可能性もある。「借りた場所、借りた時間」は、まさにその後の香港を象徴するフレーズとなりました。

2. 『深夜特急 1 - 香港・マカオ』 沢木耕太郎著（単行本初刊 1986、新潮文庫版 6 分冊 1994）

さて、次は、一昔前までバックパッカーのバイブルと言われた紀行小説です。この作品には、『慕情』のような時代や歴史に対する作者の思い入れは全くありません。

それもそのはずで、『深夜特急』の成り立ちは、作者が友人たちとインドのデリーからイギリスのロンドンまで乗り合いバスで行けるか行けないか、という賭けをしたことに始まります。ところが、出発の半月前にインド航空で「東京ーデリー」の破格に安い片道切符を取ろうとした際に、同じ料金で途中二カ所でストップ・オーバーができる仕組みであることを知らされ、急遽「東京ー香港ーバンコクーデリー」のチケットに切り換えます。つまり、文庫版で『深夜特急』6 分冊のうちの最初の 2 冊、「香港・マカオ編」「マレー半島・シンガポール編」は、賭けの旅のスタート地点であるインドに辿り着く前に偶然降ってわいた「通過の旅」の記録というわけです。

本書の初刊は 1986 年ですが、旅の始まりは 1947 年生まれの作者が 26 歳の時というから 1973 年頃、1 香港ドル ≒ 60 円、1 米ドル ≒ 5 香港ドルとあるので、1 米ドル ≒ 300 円、庶民にとって海外旅行はまだまだ高嶺の花だった時代です。そんな時代に、この若者は、突然思いついて仕事をすべて投げ出し、友人たちから集めた賭け金（餞別？）2 千ドル足らずを手をユーラシア大陸横断の無計画・無鉄砲な旅を始めたのです。

香港は本来の目的の旅が始まる前のおまけ、当然何の知識も持ち合わせません。インド航空のオンボロ飛行機でとにもかくにも香港に到着、行き当たりばったりの結果、九龍彌敦道（ネイザンロード）沿い尖沙咀の高層雑居ビル（重慶大廈らしい）の中の Golden

Palace Guesthouse（金宮招待所）に宿をとることになります。いかにも怪しげなそこは、いわゆる連れ込み宿であることがやがて判明します。しかし、沢木はこの安宿を（その価格故に）気に入って、ここを根城に、観光名所などには目もくれず香港の街をひたすら無計画に歩きまわります。

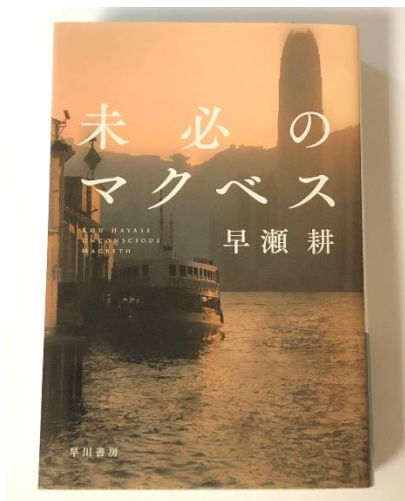
ネイザンロードを歩いて、「ペニンシュラ・ホテル」でフリーの香港地図・ガイドブックを手に入れ、YMCAで部屋をシェアしようという白人青年の誘いを断り、飲茶屋で知り合った若者（米国の大学出のインテリ銀行員の張君）の家に招かれ、一緒に中国国境の上水まで車でかけ、派遣されたばかりの日本企業の若者とその香港工場の工員男女と知り合って食事とディスコ。翌日は、スター・フェリーで香港島に出て、張君と「陸羽茶室」で飲茶昼食、ぶらつくうちに露店街に出くわし、その数、種類の多さにびっくり。九龍側に戻っても同じで、夜店はなおすごい。廟街に出くわしてなおびっくり、香港は毎日がお祭なのか、と思ってしまうほど。日がな一日街中をうろつく。どこでも何かがあり、誰かがいる。雨が降れば、傘売りが出てくるし、暑くなればキャンディー売りが出てくる、この人の多さと熱気に圧倒されてしまいます。

ただ、光と影のコントラストははっきりしています。路上に立派な漢詩を書く物乞い、胡弓を奏でる老夫婦の物乞いがいます。しかし、持てる者が常に豊かで、持たざる者が常に貧しいかと言えばことはそう簡単ではない。失職中で無一文の身でありながら、近くカネが入るからと一杯のそばを見ず知らずの沢木にツケでおごってくれた若者がいます。金宮招待所にたむろする娼婦とのきわどい一瞬もありました。かつてスーインとマークが屋形船に乗って月見を楽しんだ香港仔（アバディーン）では、蛋民（水上生活者）の子供たちとの素敵な触れ合いもありました。無目的で行き当たりばったりだからこその出会いがあり、驚きがあるという旅の実例です。

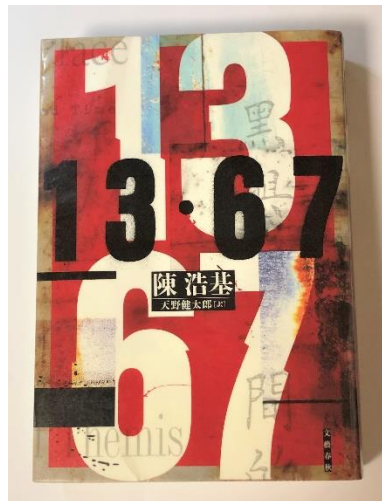
1973年頃は、東西冷戦により中国という後背地を失った香港が、産業構造を転換し、輸出志向型加工貿易と不動産・金融業で、シンガポール・韓国・台湾と並んでアジア四小龍と称される経済成長を続けていた時期です。中国は文化大革命の末期ではありましたが、1972年に日中国交正常化が成っており、その姿勢に変化が見え始めていました。時の香港の総督は第25代のマクレホース。1960年代後半が暴動とその鎮圧の時代だったことへの反省か、将来直面することになるであろう中国との折衝を見据えてか、それまでの植民地行政を転換して、交通インフラの整備や社会福祉政策に力をいれるなど善政を敷きました。沢木が訪れたのは、そんな時期の香港でした。

『深夜特急1』の第三章は、香港から気まぐれに足を延ばしたマカオ、最初から最後まで「大小」（タイスウ）という博奕の話です。船上カジノの澳門皇宮と、リスボア・ホテル裏手の葡京娯楽場が舞台。「大小」の魔力にはまった沢木は、何とかディーラーの裏をかこうとするもののうまくいかず、旅の資金2千ドルをまるまる失う危険に直面します。破局

に向かって進んでいることをわかりながら、それを快感に覚えてしまっても止められない。しかし、すんでのところで奇跡が起こって、2百ドル程度の負けにまで挽回し、疲労困憊して香港に戻ります。マカオという闇、ギャンブルの魔力は、沢木の『深夜特急』の旅を、スタート地点にすら立たせることなく終わらせてしまうところだったのです。



早瀬耕『未必のマクベス』（ハヤカワ文庫）



陳浩基『13・67』（文藝春秋）

3. 『未必のマクベス』早瀬耕著（単行本初刊 2014、ハヤカワ文庫 2017）

時代は一挙に跳びます。2009年、香港が中国に返還されて12年、前年には北京五輪が開催されて（香港で馬術競技を実施）、中国との連帯感が比較的強かった頃。香港は、中国経済との緊密化を強め、アジア、世界に開いた大金融センターになっています。

本書の主人公中井は、日本のIT企業のサラリーマンで、交通系ICカードのシステムを東南アジアに売り込んでいます。バンコクから香港に行くはずの飛行機が、香港空港のトラブルでマカオに降りることになったところから物語は始まります。中井は『深夜特急』のマカオを思い出し、同僚と共にリスボア・ホテルに向かい、沢木がその魔力にはまった同じ場所、同じ「大小」で大勝ちしてしまいます。その後に誘われて食事を共にした三人の娼婦たちの一人から、「あなたは、王になって、旅にでなければならぬ」と予言されます。そこから中井の人生は急転、シェークスピアの『マクベス』が三人の魔女の予言とマクベス夫人にそそのかされ、己の野心から国王の位を篡奪するのに対し、中井本人にはその気がないのに、香港法人の董事長になったのを手始めに、周囲の善意と野望、嫉妬が中井をどんどん『マクベス』の運命に近づけていきます。中井は『マクベス』になるのを恐れながら、その一方で自分が大切にしているものを守ろうとします。

本書は純然たるフィクション、ネタバレを起こすような紹介はしないでおきます。た

だ、『深夜特急』の沢木が「通過の旅」で香港を訪れ、街を歩き回ってひたすら驚いていたのに対して、本書の中井は、香港を拠点にして、ビジネスで東京、バンコク、ホーチミンを行き来します。日本企業のサラリーマンが、アジアを飛び回って仕事をするのがごく普通になっていること、その売り物であり王になるための鍵となるのがITシステムのとある技術であることに、時代の移り変わりを感じます。

マカオのリスボア・ホテルのほかにも、本書には『深夜特急』にあった「ペニンシュラ・ホテル」（セキュリティが万全で中井の住居となる）や「陸羽茶室」で食事をする場面が出てきます。また中井は沢木も乗った「スター・フェリー（天星小輪）」をよく利用します。スーインとマークの時代からこうした施設は変わらず続いています。しかし、本書のカバーに描かれ、中井の会社がオフィスを構える ifc（国際金融中心）は、『深夜特急』の頃には影も形もありませんでした。その ifc を眺めながら中井はつぶやきます。

「ヘッジ・ファンドや、ねずみ講紛いの金融業者、リスクを取らない投資顧問や、まだ何も作っていない宇宙開発のベンチャー企業、そんな団体ばかりが入居する高層ビルだ」

本書では、マカオで暮らす某国の亡命王子のほか、偽造パスポート、整形術、暗殺請負人など、フィクションならではのものが登場しますが、それが異常とは感じられない。香港・マカオには、そうした「異能の人たち」が裏で活躍しているイメージが今でもついてまわります。

最後に、本書はミステリィやサスペンスのジャンルに分類されると思いますが、青春の甘くてほろ苦くもある思い出が詰まった純愛小説でもあることを申し添えておきます。

4. 『13・67』陳浩基著（2014）（天野健太郎訳 文藝春秋社 2017）

最後に紹介するのは、香港の作家による6つの短編からなる連作ミステリィです。タイトルの『13・67』は、2013年～1967年の意味で、香港警察の伝説の警視クワン（關振鐸）が全編を通じての主人公です。

第1編の時代設定は2013年、末期肝臓がんで昏睡状態にあるクワン警視が死の床から殺人事件を推理します。本書は、そこから、2003年、1997年、1989年、1977年、1967年と、時代を遡っていく逆年代記（リバース・クロノロジー）の手法をとっています。

ミステリィである本書について、やはりネタバレにつながるような野暮な紹介はできませんが、特徴は香港の歴史を踏まえた警察小説であることでしょう。それが一番よく現れたのが、第5編「借りた場所に」（1977年）です。「廉政公署」に勤務する英国人家庭の一人息子が誘拐されるという事件です。「廉政公署」とは、公務員などの公職による汚職や不正を取締まるために、マクレホース総督の統治期に設けられた専門機関です。当時汚職が日常茶飯事で自浄作用が働かず、市民の反感をかっていた警察は、廉政公署の取締まりの重要ターゲットの一つでした。しかし、この取締りがあまりに徹底していたため、これでは警察官が全くいなくなってしまうと反発を呼び、1977年に警察官たちのデモが廉政公

署を取り囲むという事件が起きます。この事件の結果、軽微な賄賂は不問にするという妥協がなされ、それ以降は警察のクリーン度が高まることになりました。

本書では、「警察官の真の任務は市民を守ること」を信念とするクワン警視とその同僚たちが、時に危ない手も使って事件の真相を糾明し、凶悪犯やマフィアに迫っていきます。第4編までは社会背景に直接言及することはほとんどありませんが、第5編以外の各編も、香港の歴史上大きな政治的事件があった年に舞台が設定されています。

第1編 2013年は、本書が書かれた時点では近未来ですが、普通選挙を求める大学教授らの「讓愛與和平佔領中環」(Occupy Central with Love and Peace) 構想が公表され、それは翌2014年の雨傘運動「和平佔中」(セントラル占拠)につながっていきます。

第2編 2003年は「基本法23条」(いわゆる治安条例)立法に反発して50万人デモが起き、立法を棚上げに追い込みました。

第3編 1997年は、言わずと知れた中国への返還、香港特別行政区が成立した年。

第4編 1989年は、中国の民主化運動支援のための100万人デモがありました。その後北京で6・4天安門事件が起きます。

第6編 1967年は、ホンコンフラワー製造工場の労働争議が大規模な反英暴動に発展し、鎮圧後も弾圧が続いた年でした。

各編の年に起きたデモや集会に際して、毎回市民と直接対峙したのは香港警察です。しかし、第1篇の冒頭にあるように、この間に香港警察のイメージは変化しました。植民統治時代、香港警察は上層部を英国人が占め、女王陛下に忠誠を誓う組織でした。70年代には宿痾だった不正・汚職を撲滅して市民の信頼を得ていきます。しかし、中国への返還後は、中央政府に依存する香港政府の姿勢の下で治安維持の任に当たり、次第に政府筋に付度を働かすようになって、市民に反感を抱かれるようになっていきます。香港市民の活動家たちは、かつては反英、今は反中であり、彼らにとって、香港警察は昔は黄色い犬、今は紅い犬になっているということなのかもしれません。

このように本書は、リバーズ・クロノロジーで主人公の警察官人生を遡ることで、香港の変遷を想起させられる構成になっています。本格ミステリイである各編を読み進むと、第5編「借りた場所に Borrowed Place」、第6編「「借りた時間に Borrowed Time」にたどり着きます。そう、あの『慕情』の名文句に還ってきたのでした。そして、第6篇のそのまた最後に、ある仕掛けが設けられています。この終盤2編のタイトルと最後の仕掛け・・・ここに、香港の今に通ずる暗示が読み取れるような気がしてなりません。

いかがでしたでしょうか。拙いブックガイドでしたが、実際に作品を手にとって、そこに描かれた「時」から香港の今を思う参考にしていただけたら幸いです。

(2019.10.30)